

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	梅堯臣の聯句について
Author(s)	大井, さき
Citation	中國中世文學研究 , 70 : 36 - 53
Issue Date	2017-09-25
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00044515
Right	
Relation	



梅堯臣の聯句について

大井さき

はじめに

北宋の梅堯臣（一〇〇二—一〇六〇）の詩集は全七首の聯句を収める。約二九〇〇首に及ぶ詩詞中で、その割合は極めて小さい。欧陽脩や蘇舜欽ら同時代の詩人たちと比べて特に量が多いというわけでもない。しかし、梅堯臣の聯句は彼の詩の変遷を考えるにあたって、注目に値するのではないかと思う。梅堯臣の対人関係の変化は、その詩風の変遷と軌を同じくしているからである。梅堯臣の詩は、仁宗の慶暦年間（一〇四一—一〇四八）の後半頃より、日常生活のありふれた事物を取り上げる傾向が顕著になる。詩作活動から窺える対人関係も、慶暦四（一〇四四）年頃を境に性質がやや変化している。慶暦三年以前は、洛陽滞在中の数年間を除いて、一人の相手に対し一、二首程度の応酬に留まり、複数人で集まって詩を応酬した形跡もほとんど見られないが、慶暦期後半になると特定の人物との頻繁な交際が認められるようになる。梅堯臣の詩の変化は、詩人の交流活動との関連から検討できるのではないだろうか。中でも他者との共作である

聯句は、多くの場合詩作の場を共有するため、両者の関連を追求する糸口となりうるように思う。

さらに、中国古典詩中の聯句の発展過程においても、梅堯臣の作は特別な意味をもっている可能性がある。梅堯臣には、韓愈と孟郊が「城南聯句」で試みた、対の一方を作って相手と交替するスタイル（跨句体）を用いた聯句が二作見られる。しかも二作とも、韓愈と孟郊の試みをそのまま踏襲しているわけではない。先行研究では、まず青木正兒氏が「聯句浅説」（『山口大学文学会誌』第一巻創刊号、一九五〇年）において、韓愈と孟郊は一人目が一句を作ったのちすぐに二人目が対を作る形をとっているが、梅堯臣によって新たな発展が加えられたとする。「梅堯臣の新式では其の第一句を三句に増加し、且つ篇首には二聯の不對句を用ゐた。また篇尾も『城南聯句』は一人一句で収めてあるが、梅氏は三句或は九句を用ゐた。」といい、梅堯臣の創意が当時行われていた形式の一つかは未詳だが注目すべきであると指摘する。また、跨句体を用いた梅堯臣の聯句のうち一作は、途中から担当句数が変化する。この点については、齊藤茂氏が「韓孟

聯句の新しさ―『征蜀聯句』を中心に―」（『中国学志』観号、大阪市立大学中国学会、二〇〇五年）の中で言及し、「跨句體の發展形」と位置づけている。

本稿では、梅堯臣の聯句七首について、梅堯臣詩全体への影響の有無、聯句の發展過程における位置づけなどを考えていく前段階として、まず七首がどのような作であり、各々にどのような特徴を認めるべきなのかを整理したい。

一 制作年について

考察の対象となるのは以下の七首である。底本とする『梅堯臣集編年校注』（朱東潤編年校注、上海古籍出版社、一九八〇年。以下『編年校注』）の収録順に、題名と作者を挙げる。人物名は原注のまま表記した。

1. 「聯句附」（謝少卿、絳、堯臣、維、衍、良臣）
2. 「希深洛中冬夕道話有懷善慧大士因探得江字韻聯句」（希深、聖俞）
3. 「希深本約遊西溪信馬不覺行過據鞍聯句」（希深、堯臣）
4. 「同希深馬上口占送九舅入京城親聯句」（希深、堯臣）
5. 「玉塵尾寄傅尉越石聯句」（絳、堯臣）
6. 「風瑟聯句」（希深、聖俞）
7. 「冬夕會飲聯句」（堯臣、景初）

1と6の制作者に見られる「絳」及び「希深」は、梅堯臣の妻の兄、謝絳（九九四—一〇三九、字は希深）を指すと思われる。7の「景初」は謝景初（一一〇二—一一〇八四）で、その息子にあたる。この七首は、編年前の詩集『宛陵先生集』¹⁾では、全て巻十一の末尾に収められている。巻十一は他に慶暦四、五（一一〇四四、四五）年の詩を収録するが、これらの聯句も同年の作というわけではない。うち六首の唱和相手と思われる謝絳が、この時すでに没していたからである。『編年校注』は1と6を明道元（一一〇三二）年の詩を録する巻二の巻末に、7を慶暦四年の詩を録する巻十四の巻末に載せる。編者の朱東潤氏は編年の根拠を次のように語る。

堯臣集中聯句七首、舊附『宛陵文集』第十一卷末。十卷爲慶暦四、五年（一一〇四四—一〇四五）間詩、謝絳死於寶元二年（一一〇三九）、不容在慶暦四年（一一〇四四）、更有與堯臣聯句之作。按天聖九年、明道元年（一一〇三一—一一〇三二）間、二人在洛相處最久、至景祐元年（一一〇三四）三月、謝絳已任開封府判官（見『長編』卷一一四）、聯句六首當附在明道元年卷後。……

（『聯句附』補注）

……謝景初生於眞宗天禧三年（一一〇一九）、天聖十年時、僅十四歲、不容與堯臣聯句。此詩題「冬夕會飲」、疑爲慶暦四年冬間作。

右の説に少し補足しておく。まず、2は題に、4は作中に「洛中」の語が見られるため、謝絳と共に洛陽に滞在していた時期の作であるのはほぼ確実だと言える。3の「西溪」は各地に存在するが、二人が場を共有できたと思われる地域で考えると、やはり洛陽の龍門にある西溪の可能性が高そうである。1も、共作者の五人目「良臣」とは明道元年頃に直接の交流をもったことがわかっている。彼は朱氏補注に「疑爲堯臣同曾祖弟。宣城『梅氏家譜』、梅遠生子簡、超。簡生朝、朝生誠、誠生良臣。超生邈、邈生讓、讓生堯臣。」とあり、梅堯臣と祖先を同じくする同世代年下の親族と思われる。明道二年の秋の作として、梅堯臣に「送弟良臣歸宣城」詩が、歐陽脩にも「送梅秀才歸宣城」詩が見られ²⁾、それ以降は、少なくとも交流の痕跡は確認できない。謝少卿について、朱東潤氏は4の作にうたわれる「九舅」、すなわち謝氏の九番目の弟ではないかとする。聯句の内容から、謝少卿が梅堯臣らのもとへやって来たのを皆で迎えた時の作だと推測できるため、それが婚姻のため洛陽にやって来た謝氏の弟であってもおかしくはない。もちろん一つの可能性に過ぎないが、その場合やはり1の作は2、4と同時に作られたということになる。

別の可能性としては、「絳」が謝絳ではなく後に梅堯臣と盛んな交流があった韓絳(二〇二二―一〇八八)で、「維」洛陽で行った聯句と見ておくことにする。

7の「冬夕會飲聯句」が慶曆四(一〇四四)年に編じられているのも、恐らくは妥当である。そもそも梅堯臣と謝景初は、天聖五(一〇二七)年に梅堯臣が二十六歳で謝氏と結婚したことで、親族関係となった。以降、梅堯臣はその父謝絳と繰り返し詩を応酬しており、両者が共に洛陽付近で勤務していた期間は、特に盛んであった。

謝景初との最初のやり取りは宝元二(一〇三九)年、梅堯臣三十八歳、謝景初二十歳になってからだが、それ以前に交流があったとしても不思議ではない。ただ、朱東潤氏の言うように、年齢の問題がある。それに加えて、謝絳の存命中に息子の謝景初と二人で酒を酌み交わすというのがやや不自然のように思う。梅堯臣と謝景初・景温兄弟との応酬は謝絳の没した宝元二年以降が主で、唯一生前に作られた「師厚生日因以詩贈」は謝絳を賞賛する語を多く含んでおり、梅堯臣はあくまで謝絳の子として謝景初と接しているようである。それを踏まえれば、やはり宝元二年以降の作とする方が良いように思う。その後二人が冬を共に過ごしたことが明らかなのは、康定元(一〇四〇)年と慶曆四年である。前者は旅の道中を一部共にしただけで、第一句で「與君數夜飲(君と數し

ば夜飲す)」というほどの期間交際したとは考えづらく、

がその弟の韓維(一〇一七―一〇九八)であることが考えられる。5「玉塵尾寄傅尉越石聯句」も、制作者が「希深」ではなく「絳」となっているが、この聯句を受け取った傅越石とは、梅堯臣らの洛陽滞在期から二十年も後の皇祐五(一〇五三)年にもう一首やり取りが残っており、謝絳没後に別の「絳」という人物と行った聯句の可能性も考えられなくはない。

とはいえ、原注の表記が諱を用いたり字を用いたりと不統一であることからすれば、「絳」と「希深」のみ使い分けがされていると考えるより、謝絳の諱と字が混在しているのを見る方が自然である。さらに詩集の構成から考えても、謝絳とするのが妥当だろう。『宛陵先生集』全六十卷の構成は、卷一から卷十一まで一旦完結している。各巻の目録部分に「西京詩」「池州後詩」「汝州後詩」「湖州後詩」という詩人の滞在地による区分が見られ、卷十二以降はそれがない。慶曆六(一〇四六)年に歐陽脩によつて書かれた「梅聖俞詩集序」に、「聖俞詩既多、不自收拾。其妻之兄子謝景初懼其多而易失也、取其自洛陽至于吳興已來所作、次爲十卷。(聖俞詩既に多きも、自ら收拾せず。其の妻の兄の子謝景初其の多くして失ひ易きを懼るるや、其の洛陽自り吳興に至る已來の作る所を取り、次いで十巻と爲す。)」とし、梅堯臣の洛陽から吳興(湖州)時代までの詩を編纂したと言ふのにほぼ合致する。恐らくこの十一巻までが、第一次編纂の詩集の原型を留めており、聯句七首はその第一首に「聯句附」と題する

慶曆五年以降は梅堯臣も謝景初も別々の地に赴任する。任期の合間に都などでしばし交流したことはあるかもしれないが、やはり可能性が最も高いのは慶曆四年ということになる。

以上のように、他の可能性も否定はできないが、恐らくは1〜6が明道元(一〇三二)年頃、洛陽での作であり、7が慶曆四(一〇四四)年の冬、汴京での作であろうと考えられる。

二 形式について

七首について、まずその形式を見ていきたい。詩題、詩体(句の総数)、制作者の人数(内訳)、担当句数、押韻の順で挙げる。

1. 「聯句附」

五言古詩(十六句)／六人(謝少卿、絳、堯臣、維、衍、良臣)／3・2・2∶2・2・3／下平十陽、十一唐(同用)

2. 「希深洛中冬夕道話有懷善慧大士因探得江字韻聯句」
五言排律(十二句)／二人(希深、聖俞)／2・2∶2・2／上平四江

3. 「希深本約遊西溪信馬不覺行過據鞍聯句」
五言律詩(八句)／二人(希深、堯臣)／4・4／上平十二齊

4. 「同希深馬上口占送九舅入京城親聯句」

五言律詩（八句）／二人（希深、堯臣）／4・4／上平十五灰、十六咍（同用）

5. 「玉塵尾寄傅尉越石聯句」
五言古詩（十六句）／二人（絳、堯臣）／8・8／上平二十文

6. 「風瑟聯句」
五言律詩（八句）／二人（希深、聖俞）／4・4／上平一東

7. 「冬夕會飲聯句」
五言古詩（五十句）／二人（堯臣、景初）／3・2・2∶2・2・6・6・8・9／上平一東、三鍾（東
独用）

まず、近体の2、3、4、6と古体の1、5、7に大きく分けられる。近体のうち、2は十二句の排律型、3、4、6は律詩型である。古体のうち、1と5は十六句、7は突出して長く五十句より成る。また、制作者数は1のみ六人、あとはいずれも二人である。多人数での聯句制作は古くより伝統的に行われており、唐代にも二人によるものから二十人以上が参加するものまで様々なケースが見られる。句の長さという点では、五十句を遙かに上回る作が従来より何首も作られている。ただし、二人だけで五十句以上にのぼる長篇の聯句を作った例は、劉禹錫と白居易、韓愈と孟郊という、聯句の発展において特別な役割を担ったとされる人物たちの作に限られる

偶数句交替とする）をとる2と6と、奇数句までを作って相手に交替する形式（以下奇数句交替）をとる1、7とに分け、それぞれの特徴や共通点・相違点を考察する。

（1）偶数句交替の聯句

2. 「希深洛中冬夕道話有懷善慧大士因探得江字韻聯句」

（希深、聖俞）

3. 「希深本約遊西溪信馬不覺行過據鞍聯句」（希深、堯臣）

4. 「同希深馬上口占送九舅入京城親聯句」（希深、堯臣）

5. 「玉塵尾寄傅尉越石聯句」（絳、堯臣）

6. 「風瑟聯句」（希深、聖俞）

梅堯臣と謝絳の二人による作で、いずれも謝絳が先にうたい、梅堯臣がそれに続けるという形をとる。2「希深洛中冬夕道話有懷善慧大士因探得江字韻聯句」（希深、洛中にて冬夕道話して善慧大士を懷ふ有り、因りて探りて江字の韻を得たるの聯句）は、謝絳と洛陽にて冬の夜に仏道を語らい、梁から陳代の僧、傅大士（四九六一五六九）のことが忍ばれたので作ったというものである。二句交替で一人六回ずつ、計十二句をうたう。仏教語を多用しており、仏教との関わりから検討してみる必要があるため、今回は詳しく論じる余裕がなかった。3、4、6は律詩型で、第一句から平仄と押韻を整えなければならな

「3」。この点で、7の作は他六首とは異なる意味をもって
いるようである。

続いて注目すべきなのは、冒頭でも少し触れた、句交替のスタイルである。1と7は一人目が三句うたって受け渡し、以降二句ずつで交替するという、奇数句交替の形式であり、しかも韓愈と孟郊によって初めて行われた形に新たな変化が加えられている。六朝聯句の主流が五言四句交替、唐代最も一般的であったのが五言二句交替で、五言四句交替も二句交替に次いで多数作られていることから、残る五首のうち2、3、4、6は聯句の最も一般的な形をとっていることになる。5は八句ずつで交替しているが、変則的な交替をするものを除くと、唐代以前に見られる八句交替の聯句は北周・庾信「冬狩行四韻連句應詔詩」のみのようである¹⁴。作例はあるため単に現存していないだけなのかもしれないが、今見られる作品数の差からすると、やはりやや特殊な作り方と言えそうである。

三 内容および句の繋げ方

各首について検討するにあたって、形式から二つに分けることにする。近体、古体で分けるのも一つの方法だが、聯句の句繋ぎにとつては、一聯を一人で担当するか、二人で半分ずつ作るかという違いの方がより大きく関わってくるのではないかと思う。そこで、以下では七首の聯句を、偶数句までを作って相手に交替する形式（以下
いたため、遅くとも聯句を開始した時点で詩体を決めていたと推測できる。まず謝絳が平仄を守りつつ第一・二・四句で押韻し、第三・四句を対にして、律詩の半分までを作った状態で梅堯臣に引き渡す。梅堯臣はそれを受け継いで平仄、押韻、対句の規則を守りつつ後半を作り、一篇としてまとめる。具体的に見てみよう。

3 梅堯臣・謝絳「希深本約遊西溪信馬不覺行過據鞍

聯句」（希深 本西溪に遊ばんと約すも、馬に信せ

覺えずして行き過ぎ鞍に據るの聯句）

1 有意訪西溪 意有りて西溪を訪れ

2 順途吟思迷 途に順ひて吟思迷ふ

3 及茲詢野老 茲に及びて野老に詢へば

4 已恨過芳蹊 已だ恨む 芳蹊を過ぐるを

5 醉客但多興 醉客は但だ興多く

6 幽禽空自啼 幽禽は空しく啼く

7 無由駐金勒 金勒を駐むるに由無く

8 林表日光低 林表に日光低る

謝絳と洛陽の龍門にある西溪という名所に出かけて行き、そこが気付かぬまま通り過ぎてしまったという出来事について二人で聯句したものである。謝絳は、主題である西溪の「溪」を韻字として第一句の末に配し、名所を通過してしまったことに気付く所までをうたう。梅堯臣は、第二句で「詩作に夢中になつていた」と原因

が述べられたのを承けて、我々「醉客」も山中でひっそり鳴く「幽禽」も、自らの思いのままに楽しんでいて、到る所で情趣をかき立てられてしまうのは仕方ないことだ、と慰める。馬を降りる間もなく日が暮れてしまった、とうたう尾聯の「金勒」は、もと金のおもがいの意味で、ここでは騎馬の美称として使われる。目上である謝絳を尊重しながら、謝絳の句に受け答えをする形で、梅堯臣の句が作られている。

4 梅堯臣・謝絳「同希深馬上口占送九舅入京成親聯句」(希深と同じに馬上に口占して九舅の京に入りて親を成せるを送るの聯句)

- 1 之子洛中來 之の子 洛中に来たり
- 2 芳嶠喜暫開 芳嶠 喜びて暫く開く
- 3 人誇阿連少 人は阿連の少きを誇るも
- 4 吾愧士衡才^{希深} 吾は士衡の才に愧づ
- 5 丹闕鳳皇去 丹闕 鳳皇去りて
- 6 清川鴻雁迴 清川 鴻雁迴る
- 7 都門春色美 都門 春色美しくも
- 8 相送思悠哉^{堯臣} 相送りて思ひ悠なるかな

梅堯臣の妻謝氏および謝絳の弟である「九舅」が、洛陽で婚姻をすませて帰って行く時、馬上にて口ずさんだという即興の作である。謝絳がまず、弟が洛陽にやって来た喜びをうたう。『詩経』以来婚姻を連想させる「之子」

の語や、「芳嶠」という酒樽の美称など、めでたい場面にふさわしい表現を用いている。対となる第三・四句では、弟を六朝宋・謝靈運の従弟謝惠連に擬えて称え、自身を兄弟で名を知られた晋の陸機・陸雲のうち兄である陸機に引き比べて卑下する。

続く梅堯臣は、洛陽から去ってゆく「九舅」に対する別れ難い情をうたう。新婚夫婦を「鳳皇」に、義弟「九舅」を「鴻雁」に擬えて対とする。大雁を兄弟に喩えるのは、『札記』王制に「父之齒隨行、兄之齒隨行、朋友不相踰。(父の齒には隨行し、兄の齒には隨行し、朋友には相踰えず。）」とあるのに基づく。結びの「悠哉」は『毛詩』周南「關雎」に「悠哉悠哉、輾轉反側(悠なる哉、悠なる哉、輾轉反側す)」とあるように、古くより会えない人を使う場面に用いられる。格式のある美しい語で、やはり慶事にふさわしい雰囲気が作られている。謝絳が詩題のうち「成親」を中心にしたのに対し、梅堯臣が残る「送別」を担当するという形で一篇にまとめたのである。謝絳が第四句で一人称「吾」を用い、自分の視点から句を作るのに対し、梅堯臣は個人の立場を前面に押し出してはおらず、謝絳が主体となって聯句を行っているような印象を受ける。

2と4の三首は、謝絳との間で起きた出来事を主題とするが、5「玉塵尾寄傅越石聯句」と6「風瑟聯句」は、詠物に類する作である。先に3、4と全く同じ形式をもつ6の作を見てみよう。

5は、八句交替という点が少し特殊と思われる作である。玉塵尾は、大鹿の尾で作られた玉製の柄の扇子で、談話のときに手に持つもの。傅越石という人物に送った手紙に添えた詩であるため、玉塵尾を詠じつつ傅越石の優れた話術や人柄を賞賛する内容となっている。

5 梅堯臣・謝絳「玉塵尾寄傅越石聯句」(玉塵尾 傅越石に寄するの聯句)

- 1 齋中獨何物 齋中 獨り何物か
- 2 持之想見君 之を持てば君を想ひ見る
- 3 惟茲玉塵尾 惟れ茲の玉塵尾
- 4 信美而有文 信に美しく而して文有り
- 5 夫子善談道 夫子 善く道を談り
- 6 臺臺詞如雲 臺臺として詞 雲の如し
- 7 在握昔同色 握に在りて昔 色を同じくし
- 8 傾坐今離羣^絳 坐を傾けて今も羣を離る
- 9 况託懷袖好 況んや懷袖の好きに託れば
- 10 曾親蕙蘭薰 曾ぞ蕙蘭の薰に親しまん
- 11 嘗許助閑放 嘗ては閑放を助くるを許され
- 12 於焉探典墳 焉に於いて典墳を探れり
- 13 既乃阻清燕 既に乃ち清燕を阻まれ
- 14 復屈驅虻蚊 復た屈して虻蚊を驅る
- 15 自殊白團扇 自ら白團扇と殊なれば
- 16 未畏秋葉紛^{堯臣} 未だ秋葉の紛たるを畏れず

6 梅堯臣・謝絳「風瑟聯句」

- 1 竅竹漏天風 竹を竅ちて天風を漏らし
- 2 張絃擬嶧桐 絃を張りて嶧桐に擬ふ
- 3 佳名從此得 佳名 此從り得
- 4 妙響未曾窮^{希深} 妙響 未だ曾て窮まらず
- 5 夜靜危臺上 夜靜かなり 危臺の上
- 6 人閑皎月中 人閑かなり 皎月の中
- 7 依依聽不足 依依として聽き足らず
- 8 秋露滿蘭叢^{聖俞} 秋露 蘭叢に滿つ

「風瑟」は、瑟(おおごと)のような形で、ひさしの下などに掛けておき、風によって弦が音を立てるものだと思われる。前半で謝絳は「風瑟」のさまとその素晴らしさを直接うたい、梅堯臣は第四句の「妙響」を承けて、後半で「風瑟」から発せられる音について取り上げる。音自体を全く描かず、音が響く空間の静けさや聞く者の心境によって音を表した点に工夫が見られる。用語については、「天風」「皎月」「依依」「秋露」「蘭叢」など、古くより詩に見られる語・描かれる題材が前半後半ともに用いられている点が指摘できる。また、第二句の「嶧桐」は琴や瑟の良材となる桐で、『尚書』禹貢に「徐州」厥貢惟土五色。羽畎夏翟、嶧陽孤桐。(徐州)厥の貢は惟れ土五色なり。羽畎の夏翟、嶧陽の孤桐なり。」と見られる語である。

謝絳は冒頭四句で玉塵尾を詠じ、次の四句で傅越石の
話術を褒め称える。第七句は『晋書』王衍伝に「衍既有
盛才美貌、明悟若神、常自比子貢。兼聲名藉甚、傾動當
世。妙善玄言、唯談老莊爲事。每捉玉柄塵尾、與手同色。
（衍既に盛才美貌有り、明悟なること神の若く、常に自
ら子貢に比ぶ。兼ねて聲名藉甚にして、當世を傾動す。
妙善たる玄言もて、唯だ老莊を談るを事と爲す。毎に玉
柄の塵尾を捉れば、手と色を同じくす。）」とあるのに基
づき、かつて傅越石が玉塵尾を持つていた姿を追憶する。
第八句では、その話ぶりは今でも群を抜き、聴衆を惹き
付けていることでしょうか、と相手に思いを馳せる。

後半は傅越石を玉塵尾に擬え、第九〜十二句でかつて
天子の側に仕えていた頃の栄光を、第十三・十四句で左
遷されてからのことをうたう。結びの二句では漢・班婕
妤「怨歌行」を用い、玉塵尾であるあなたは、かの白团
扇のように寵愛を失ってしまうことはありませんよ、と
慰めのメッセージを送る。第九句で「懷袖」という語を
「怨歌行」から引いたのが、結びに活かされている。玉
塵尾と白团扇の対比という、機知に富んだ表現である。

この作は一人の担当句数が八句と長いが、句の繋げ方
を見ると、独立した律詩の唱和のようにはなっておらず、
やはり二人で一篇を作ろうとする意識が窺える。謝絳は
回想から「今」に及んだ所で梅堯臣にバトンを渡してお
り、前半だけで完結するようには作っていないし、梅堯
臣は後半を「況」という、直前の内容を踏まえて更に進

んだ状態を表す虚詞から始めている。律詩型の聯句と異
なるのは、平仄や対を整える必要がない点で、実際前半
は第六・七句以外みな対をなさない。そのうえ、かなり
散文的な表現を多用している。例えば2「之」や、3「惟
茲」、4「而」などの省略可能な虚詞が挙げられる。後半
にも、9「況」、10「會」、11「嘗」、12「於焉」、13「既
乃」、14「復」など、虚詞が大量に使われる。この作に特
徴的な点と言えるだろう。ただし、前半が多く散句であ
る点は後半に引き継がれず、第九句以降は全ての聯がほ
ぼ対といえる形をとる。しかも梅堯臣の句には、「怨歌行」
の他に『楚辞』「離騷」に「余既滋蘭之九畹兮、又樹蕙之
百畝（余既に蘭を滋多たるの九畹あり、又た蕙を樹多た
るの百畝あり）」とうたわれる「蕙蘭」や、古く『春秋左
氏伝』などに記載のある「三墳五典」を短縮した「典墳」
など、古雅な語が用いられる。うたう内容も関係しては
いるだろうが、二人の作り方に少し差があるように感じ
られる。この点も、右に見てきた作に相違する。ちなみ
に八句交替という形式は、欧陽脩らの聯句にも確認でき
る。手紙代わりに聯句を寄せることも含めて、この作が
中国の聯句作品全体の中でどのように位置づけられるの
か、改めて調査する必要があるだろう。

以上をまとめると次の通りである。2〜6の聯句は、
謝絳との出来事を主題とするものと、詠物に類するもの
とがあり、いずれも謝絳が先行して句を作っている。梅
堯臣は多くの場合、内容および用いる語句の調子を合わ

せ、目上である謝絳を立てながら句を繋げている。また、
典故のある表現や、伝統的に詩に見られる語が比較的頻
繁に使われる。ただし5の作では、散文的な表現が繰り返
返されるほか、謝絳と梅堯臣の作り方に差が読み取れる
など、他の作とは異なる点がある。

(2) 奇数句交替の聯句

1. 「聯句附」(謝少卿、絳、堯臣、維、衍、良臣)
7. 「冬夕會飲聯句」(堯臣、景初)

続いて、奇数句交替のスタイルをとる1と7の聯句を
見ていきたい。1の方は題に明記されていないが、二首
とも自分たちの交遊を主題としたものである。

1 梅堯臣・謝絳ほか「聯句附」

- 1 古木含清吹 古木 清吹を含み
- 2 池上増晚涼 池上 晩涼を増す
- 3 余懷本達曠 謝少卿 余が懐ひ本より達曠なれば
- 4 聯此傲羲皇 此に聯ねて羲皇を傲らん
- 5 孤鷗可以狎^{ごう}絳 孤鷗は以て狎るべく
- 6 幽岸足以觴 幽岸は以て觴するに足る
- 7 幸有彭澤酒 堯臣 幸ひに彭澤の酒有れば
- 8 便同永嘉堂 便ち永嘉の堂に同じ
- 9 潘生起爲壽 維 潘生は起ちて壽を爲し

- 10 王子齊陳章 王子は齊しく章を陳ぬ
- 11 林端見新月 衍 林端に新月を見
- 12 草際聞寒蟬 草際に寒蟬を聞く
- 13 照水螢影亂 良臣 水を照らして螢影亂れ
- 14 拂筵蓼花香 筵を拂ひて蓼花香る
- 15 徘徊戀嘉境 徘徊して嘉境を戀へば
- 16 坐使歸興忘 少卿 坐ろに歸興を忘れしむ

※「可以」、四部叢刊本は「可與」に作るが、『編年校注』には指摘が
ない。

謝少卿がこの聯句を主宰したのであるか、冒頭三句と
末尾の三句を彼が担当し、間の十句を五人が二句ずつ担
当する。先行研究に言及される通り、第一・二句は対を
なすが、第三・四句は対をなさない。奇数句で交替する
スタイルは、前句を承けていかに対を構成するかに重点
があるはずだが、謝絳はこの条件を無視して句を繋いで
いる。では、第四句で謝絳は何を意図したのであるか。
まず「聯此」の語で、聯句の制作という行為そのものを
うたい込む。続く「傲羲皇」は、晋・陶淵明「與子儼等
疏」に基づく表現である。「常言五月中、北窗下臥、遇
涼風暫至、自謂是羲皇上人。(常て言ふ五月中、北窗
の下に臥し、涼風の暫く至れるに遇へば、自ら謂へらく
是れ羲皇上人か。）」と、涼風の吹く窓辺で、羲皇上人
すなわち伏羲氏以前の太古の人のように、世事を忘れた
自適を得られるという。謝絳は、第一〜三句で謝少卿が

うたった清涼な風景と広々とした心境からこの典故を導き、「太古の人々と同じだ」と述べる陶淵明の境地を聯句によって凌ごうではないか、と聯句の方向性を定めている。実質的に謝絳こそが聯句を主導しているのである。

それを承けて第五句以降は、謝少卿が第十五句で「嘉境」とまとめてみせる境地を、各自が思い思いの方法でうたっていく。第五句から第十句までは、出典のある表現である。謝絳の第五句は、梁・江淹「雜體詩三十首」張廷尉（雜述）「綽」（『文選』卷三十一）にほぼ同じ表現が見られ、「物我俱忘懷、可以狎鷗鳥（物我俱に懐ひを忘るれば、以て鷗鳥と狎るべし）」とある。基づくのは、その李善注に引く『莊子』（佚文。今『列子』黃帝篇に見える）の「海上有人好鷗鳥者、旦而之海上、從鷗鳥游、鷗鳥至者百數。其父曰、『吾聞鷗從汝遊、試取來、吾從玩之』。曰、『諾』。明旦之海上、鷗鳥舞而不下。（海上に人の鷗鳥を好む者有り、旦にして海上に之き、鷗鳥に從ひて遊べば、鷗鳥の至る者百數。其の父曰く、『吾聞く鷗鳥に從ひて遊ぶと、試みに取り來たれ、吾從ひて之を玩ばん』と。曰く、『諾』と。明旦海上に之くに、鷗鳥舞ひて下らず。）」という故事に拠る。謝絳は自分たちの心が何のたくらみもない状態であることをうたい、陶淵明に対抗したのである。これを承けた梅堯臣は、「孤鷗」から「幽岸」を導き、語の性質をそろえて対を作っている。この第六句が基づくのは、恐らく晋・王羲之の蘭亭における宴であろう。この場が風雅な楽しみを分かち合

詩句を表したのだろう。「衍」は、自分たちが聯句を連ねる様子を王羲之らに擬えることで、指定されたテーマの通り宴の風雅な様子をうたう。同時に、第三句と同様、聯句を作ることそのものをうたい込み、一旦区切りを付ける。そして、この句で典故を用いた描写が終わり、第十一句からは自然描写が始まる。以下四句でも、やはり対となる語の性質が事細かにそろえられている。

末尾の二句は、対が作られていない。この場合は一人で句を繋いでいるので、奇数句交替の形式であることとは矛盾しない。内容は、全体のまとめにあたる。謝少卿はこの素晴らしい場から離れがたく、故郷に帰りたい気持ちも忘れてしまうといひ、第三句に「余懷」と言ったのに次いで、再び自身の個人的な心情をうたう。

以上のように読んでいくと、各々の立ち位置や聯句制作の態度が見えてくる。最後の表現から、謝少卿は故郷から謝絳らのいる地、恐らく洛陽へ一時的にやって来た人物ではないかと思われる。この会における主賓として、特別に二回、計六句を担当したのである。他の人物は、みな調子をそろえつつ一度のみ参加する。そのうち謝絳は、聯句の舵取りのな役を務めている。この状況から、謝絳を中心とする関係者が、謝少卿を歓迎する宴において、記念としてこの聯句を作ったのではないかと想像できる。

陶淵明の境地を表現しようという謝絳の設定に、梅堯臣と「維」は六朝人の典故によって応じた。「衍」が方向

うのものをもってこいの環境であることをうたう。第七・八句の「彭澤」と「永嘉」は、陶淵明と謝靈運を指す。陶淵明の「五柳先生伝」には、「性嗜酒、而家貧不能恒得。親舊知其如此、或置酒招之、造飲必盡、期在必醉。既醉而退、曾不吝情。（性酒を嗜むも、家貧しくして恒には得る能はず。親舊其の此の如きを知り、或いは酒を置きて之を招き、造りて飲めば必ず盡くし、期は必ず醉ふに在り。既に酔ひて退き、曾て情を吝にせず。）」とあり、梅堯臣は、自分たちが世事に囚われない態度で存分に飲んでいることを表現する。第七句に「彭澤酒」の語を置いた梅堯臣は、第八句で「維」がどのような語を配して対を作るかを楽しんだことだろう。「永嘉堂」は、謝靈運が永嘉郡（浙江省温州市）の太守だったときの作「晚出西射堂」（『文選』卷二十二）の射堂をいう。夕暮れの山々を見て、秋の愁いをうたった詩で、「維」は自分たちの宴席もそれに匹敵するような風情があるとする。

「潘生」は晋・潘岳のことで、「閑居賦」（『文選』卷十六）に「稱萬壽以獻觴、咸一懼而一喜。（萬壽を稱へて以て觴を獻め、咸一は懼れて一は喜ぶ。）」とあり、世事を離れ静かに暮らし、家族とともに母の長寿を祝う場面が描かれるのに基づく。「王子」は普通、王子喬を指すが、ここでは先ほど曲水の宴に擬えたのを承け、王羲之を指すと思われる。このように、典故表現が連鎖のような形で用いられている。「陳章」は少なくとも宋までの詩には用例が見られないが、押韻のため「章」を用い、

を転換し、自然描写によって応じたわけである。謝少卿の第三句「達曠」と第十五句「嘉境」は、ほとんど用例の見られない語である。双声の「嘉境」はともかく、「達曠」の語を選択した意図はよくわからない。この作は二箇所文字の異同があるため、一般に使われる「曠達」の転倒という可能性も考えられる。字音に着目すると、「曠」は去声だが、下平十陽韻と相配の関係にある。あるいは謝少卿としては、第一・二句は前置きで、第三句から本格的に聯句を始めよう、という意図があったのではなからうか。

最後に、7の聯句を見てみたい。第一節で検討したように、恐らく1〜6の聯句を作ってから十年余りを経た慶暦四年、梅堯臣四十三歳、謝景初二十五歳の冬の作である。全て奇数句において交替するが、第二十二句までは二句交替が続き、第二十三句以降は六句、六句、八句、九句で交替する。前半は相手の句に対を作ることを繰り返しながら進んでいくが、後半は担当を交替する部分のみ相手の句に対を作り、それ以外は一人で数聯を作ることになる。句の繋げ方が大きく異なるため、以下二つに分けて見ていきたい。

7 梅堯臣・謝景初「冬夕會飲聯句」

1 與君數夜飲 君と數しば夜飲し
2 唯恐酒盞空 唯だ恐る酒盞の空しきを

3 今我苦欲淺「堯臣
志を語りて此を同にする事難けれ
ばなり」
4 語志難此同
5 陳編侑歡適「景初
陳編は歡適を侑め
6 間諱何魁雄
間諱は何ぞ魁雄ならん
7 婢子寒且倦「堯臣
婢子は寒く且つ倦むも
8 主人哦不窮
主人は哦ひて窮まらず

9 燈青屢結花「景初
燈青くして屢しば花を結び
10 煎響時鳴蟲
煎響時に鳴蟲のごとし
11 穴鼠暗出沒「堯臣
穴鼠は暗に出沒し
12 風雁高雍容
風雁は高く雍容たり
13 冰霜覆瓦屋「景初
冰霜瓦屋を覆ひ
14 貂狐輪貴翁
貂狐貴翁に輪らる
15 孤床乏暖質「堯臣
孤床に暖質乏しく
16 苦語有淡工
苦語に淡工有り

17 咀嚼患「小」景初
咀嚼して患の小さきを患へ
18 煨炮驚殼紅
煨炮して驚殼紅し
19 落蟾斜入竅「堯臣
落蟾斜めにして竅に入り
20 遠漏微遞風
遠漏微かに風に遞へらる
21 醉心欺睡魄「景初
醉心睡魄を欺き
22 細書刺昏瞳
細書昏瞳を刺す
(一) ■「灸」火「肉」

第九句からの数聯を例に、具体的にみてみよう。謝景初は、灯火をうたうのに「花」による比喻表現を用いた。続く梅堯臣は、対となる句末で何らかの比喻を作る必要があり、しかも押韻のために上平一東韻の文字を用いなければならぬ。そこで選んだのが「蟲」である。そして、前句の灯火と関連付け、かつ比喻を行うという条件を満たすため、虫と灯火の共通点を利用する。梅堯臣は、灯火が燃えるという場合と虫のせき立てるような声を表す場合、ともに「煎」の語を用いることに目を付け、灯心がじりじりと焼ける音がまるで虫の首のようだという。続く第十一句を作るにあたっては、前句にうたった「蟲」から、同じく下方の穴の中に棲む「鼠」を連想する。コソコソと動き回るさまを「出沒」という疊韻語を用いて描き、謝景初に対し押韻とオノマトペを同時に考慮して対を作るといふやや難易度の高い出題をする。そこで謝景初は、「雍容」の語を見つけ出し、鼠と対照的に遙か上方でゆったりと飛ぶ雁を詠じる。前後の句が上平一東韻で押韻するのに、ここのだけ韻目の異なる上平三鍾韻が使われている状況からは、厳しい制約に頭を悩ませたであらうことが想像できる。

このように、時間的な制約の中で、相手の句にいかにか巧妙な対をつけるか、前句と関連させつつ相手にどのような句を与えるかを楽しみながら句が繋がれている。続いて、後半の第二十三句以降である。

まず、梅堯臣が先行し、連続で三句うたう。今日あまり酔えないとする第三句を承けて、謝景初は第四句にその理由を続ける。第一・二句は対になっておらず、第三・四句も対とは言えないが、「苦」と「難」という類義の語を対応させている。ここまでは、「古詩十九首」其の四(「文選」卷二十九)に「今日良宴會、歡樂難具陳。……人生寄一世、奄忽若飈塵。……(今日良宴會、歡樂具陳に陳べ難し。……人生一世に寄り、奄忽たること飈塵の若し。……)」とうたうのを下敷きとして、「短い人生のうちの得がたいひとときである今夜の宴」がテーマに掲げられる。

以降、だいたい八句ずつで場面が転換する。第五句八句では宴席の様子が、続く第九句十六句では冬の夜の情景が、第十七句二十二句では再び宴席の様子が描かれる。ちなみに、各場面の末尾には、自分たちの詩作に言及する句がきており、転換点の目印になっている。第五句以降は、対となる語の性質がかなり厳密にそろえてあり、1の作と同様の繋げ方である。ただ、一人一度きりの担当である1の場合と比べ、短い間隔で繰り返し対を作るとなると、一人ひとりの負担はかなり大きくなるはずだが、気心の知れた者同士、のびやかな気分度で句を繋ぐことを楽しんでるように見える。二人は相手の作った前句を承けて、そこに描き出された事物の性質から使えそうなものを選び出し、関連する言葉を探して対を作る。

23 吠呀聞爭犬
吠呀争犬を聞き
24 哮吼厭啼「堯臣」
哮吼啼を厭ふならん
25 撥火亂積豆
火を撥して積豆を亂し
26 附灸雙彎弓
灸を付けて彎弓を雙ぶ
(二) ■「左馬右象」
27 乾果硬迸齒「堯臣」
乾果硬くして齒を迸らせ
28 寒齧酸滿胸
寒齧酸くして胸に滿つ
29 枯蛤擘無肉
枯蛤は擘けども肉無く
30 淡脯燒可饗
淡脯は燒きて饗とすべし
31 語必造聖賢
語は必ず聖賢に造り
32 樂已過鼓鍾
樂しみは已に鼓鍾を過ぐ

33 紙窗幸未曙「景初」
紙窗は幸ひに未だ曙けず
34 絮被令旋縫
絮被は旋いで縫はしめん
35 凍痺兩股鐵
凍え痺れて兩股鐵のごとく
36 跑抓雙鬢蓬
跑き抓きて雙鬢蓬のごとし
37 脬尿既懶溺
脬の尿は既に溺すること懶く
38 棍風唯欲烘
棍の風は唯だ烘かれんと欲す
39 器皿足缺齧
器皿は足缺齧足り
40 捧執無天機
捧執は天機無し
41 兒女寒不寢「堯臣」
兒女は寒くして寢ぬられず
42 僮僕困欲嘗
僮僕は困しみて嘗ならんと欲す
43 豈無貴富徒
豈に無からん貴富の徒の
44 笑此饑寒蹤
此の饑寒の蹤を笑ふこと

45 丈夫固有負 丈夫は固より負ふもの有り
46 道義久已充 道義は久しく已に充つ
47 墨子不黔突 墨子 突を黔ませざるも
48 齒輩且得封 齒輩 且く封ぜらるるを得たり
49 勉哉梅夫子 勉めよや梅夫子
50 塞者終自通 塞がれば終に自ら通ぜん

初めの四句は宴席で聞く物音や炉の様子を描く。第二十七句からの四句は、宴席の中でも酒肴に焦点を絞り、その貧窮ぶりにも構うことなく楽しみを極める自分たちの姿を描く。さらに第三十一・三十二句で詩作そのものに言及して一旦区切りをつける。続く第三十三句からは、宴席のより詳細な描写に入る。凍えた手足、ボサボサの頭、さらにはシラミの湧いた下袴にまで筆が及ぶ。これらの句は、梅堯臣の詩の特徴として日常生活の細部に目を向ける点が指摘されていることと関連づけて検討する必要があるのであるように思う。続けて周囲の様子、子供や召使いの姿までをうたった所で、総括に移る。謝景初はここまでに行つた貧乏生活の描写を「饑寒蹤」とし、梅堯臣に対して「あなたは立派な人物であるから、必ず貧しさから抜け出す日が来るはずだ」と励ましの言葉を贈つて篇を結ぶ。

では、二人の句の作り方を見てみよう。後半は、相手の句に即座に對を付ける必要がなくなり、表現の自由度が高くなる分だけ、言葉の選択が難しくなる。梅堯臣は瘦せたハマグリ(枯蛤)、脂ののらない干し肉(淡脯)を羅列するのは、「マイナスの意味をもつ形容詞」+「食品を表す名詞」という同じ構造の語が重なってむしろ単調である。恐らく謝景初は、梅堯臣とは全く逆の方法で、酒の席における羽目の外れた詩作を表現している。くどさを感じるほどの畳みかけで笑いを誘い、さらに続く第三十一・三十二句で大仰な言い回しをして、前後の格差により滑稽さを生み出す。第三十一句の「聖賢」は酒の隠語で、この二句で「この詩がうたうのは酒の事ばかりだが、高尚な音楽などより断然楽しい」という。言葉遊びを効かせた冗談交じりの表現で、梅堯臣からの戯れに応えたのである。

続く第三十三句で「夜明けはまだなので宴を続けましょう」と促す謝景初に、梅堯臣も「綿入れを縫わせるのは後回しだ」と応じる。以降第三十五句から、宴席における二人の様子を非常に細かに描写する句が並ぶ。流れから考えて、この描写も戯れあいの延長にあるものだろう。梅堯臣が自分たちの悲惨な姿を畳みかけるように羅列するのは、謝景初が行った貧乏な酒肴の羅列への対抗のようである。それに加えて、第二十三・二十六句と同様に、詩の先行例を見出だせない語、常套句から離れた表現を使い、技巧面でも工夫を凝らしている。例えば36「跑抓」は、文字の選び方が明らかに特殊である。「跑」は獣が足で地を掻くという意味であり、「抓」も類義の「搔」字と比べると使用頻度が圧倒的に少ない。この二

初めの担当箇所、いかに奇抜な表現をするかに力を入れているようである。第二十三句の「吽呀」は『漢書』東方朔伝に基づくでたらめな謎かけの語である。「舍人」即妄爲諧語曰、『令壺醜、老柏塗、伊優亞、狎吽牙。何謂也』。朔曰、『……狎吽牙者、兩犬爭也』。(舍人)即妄りに諧語を爲りて曰く、『令壺醜、老柏塗、伊優亞、狎吽牙。何の謂ぞや』と。朔曰く、『……狎吽牙は、兩犬の争ふなり』と。二匹の犬が争うことを指すという情報しか与えられていない。第二十四句末の「𦉳(左馬右蒙)」も、字書類を除きほぼ用例が見られない特殊な文字である。第二十五・二十六句は、類似する比喩が他に見られず、特に第二十六句は、「附炙」が表すものが判然としない。串に付けたあぶり肉のこととし、それが削がれて弓なりになつた様子が「雙彎弓」だと考えた場合、「附」の語に何かを棒に刺す意味の用例が見られない点が腑に落ちない。また、「附炙」を「附火」と同じく火に当たつて暖を取るという意味で解釈し、「雙彎弓」は火に寄りつきかがみ込む二人の姿を喩えたとした場合、「炙」で火そのものを指す例が見当たらない点が疑問に残る。いずれにせよ、この作品独自の思い切つた比喩表現だと言える。梅堯臣は、でたらめとも思われるほどに凝つた表現を行い、続く謝景初の出方を窺う。

これを承けた謝景初は、梅堯臣の句のような特殊な表現への挑戦は行わない。第二十七句で梅堯臣がうたつた硬い干し果物(乾果)に続き、酸っぱい漬物(寒齋)、字が選ばれたのは、恐らく音を意識したためである。「跑」と「抓」は共に下平五肴の韻で、畳韻の語を形成する。対となる第三十五句の「凍痺」に発音面の特徴がないにも関わらず、音の技巧を加えるために、語の本来の意味をねじ曲げ、新しい語を造り出したのである。

以上のように、前半と後半で異なる形式は、聯句制作の楽しみ方にも大きく影響している。前半では相手の句にいかに対を付けるかに重点がある。多人数で行われた1の作に比べて難易度が高く、技巧への強いこだわりも読み取れる。後半は数聯ずつのやり取りを楽しむもので、偶数句交替の聯句にも似るようだが、律詩型より規則の縛りが緩く、応酬が何度か繰り返される点も異なる。比較的自由的な条件の中、相手への対応、相手の反応を考えながら、自分の担当箇所をどのように表現するか腕の見せ所がある。その結果が右に言及したような奇怪な語の頻出なのである。

おわりに

七首の聯句は、形式、内容、句の繋ぎ方ともに様々なタイプがあるが、7「冬夕會飲聯句」は特に注目するに値する。この作は、詩作を楽しむ姿勢が他の聯句と異なる。調和や完結性を求めるより、二人の作詩上の駆け引きをひたすら楽しんでいるようである。二種類のうたい方を一篇の作品の中で行っていること、表現にこだわりが強く現れていることからそれが窺える。形式にも表現

にも、既存の型にはまらない自由さがある。しかも二人の応酬は短いスパンで何度も繰り返される。そのため、この詩作は思わぬ表現を生む可能性を孕んでいるように思う。作中に梅堯臣の詩の特徴とされる、日常の細部をうたう句が見られることから、その詩風の形成との繋がりも予想される。

聯句の発展過程における位置づけとしても、やはり7の作が注目される。形式の特異さ以外に、語の用い方が特殊であることも、韓愈・孟郊の聯句と関連づけて考えてみる必要があるだろう。この点を追求することで、梅堯臣の詩が韓愈ら中唐詩人の詩から受けた影響にも迫れるかもしれない。

また、今回検討できなかった2「希深洛中冬夕道話有懷善慧大士因探得江字韻聯句」と、他の作に見られない特徴が確認できた5「玉塵尾寄傅尉越石聯句」については、稿を改めて論じたい。

注

- [1] 全六十卷。四部叢刊所収の明・万曆刊本を確認した。
[2] 朱東潤氏の『梅堯臣集編年校注』と劉徳清・顧宝林・歐陽明亮『歐陽脩詩編年箋注』（中国古典文学基本叢書、中華書局、二〇一二年）による。編年前の状況を見ると、梅堯臣の詩は『宛陵先生集』卷三所収。卷一〜三は目錄部分に「西京詩」とある。歐陽脩の詩は『居士集』（四部叢刊本）卷十所収。この詩自体には制作年の注記がないが、明道元年と二

年の詩の間に収録されている。

- [3] 聯句の長篇化については、埋田重夫「白居易と韓愈の聯句詩について―聯句形成史におけるその位置をめぐって―」（『中国詩文論叢』第二集、一九八三年）に指摘がある。また、劉禹錫と白居易、韓愈と孟郊の聯句については、橘英範「劉白の聯句について」（『中国中世文学研究』三十一、一九九七年）、畑村学「韓孟の『城南聯句』―その競作意識と詩才錬磨―」（『中国中世文学研究』二十六、一九九四年）、川合康三「韓愈・孟郊『城南聯句』初探」（『中国文学報』六十一、二〇〇〇年）などの研究がある。

[4] 八句交替の作については、埋田氏に言及がある。同論文では歴代の聯句について形式ごとに統計的な分析がなされており、本稿は主に氏の研究を参考にした。

[5] 第二句「晚涼」を四部叢刊本は「曉涼」に作る。『編年校注』に「萬曆本作『曉』、正統本、宋塾本作『晚』」と指摘がある。第五句「可以」については詩の末尾に注記した通りである。

[6] 寛文生『梅堯臣論』（『東方学報』三十六、京都大学人文科学研究所、一九六四年）に「彼の詩のなかで、より多くの部分をしめ、かつ彼の本領をよりよく發揮しているのは、何といっても日常のなにくれとない生活のなかからの鋭い觀察によって生れた詩の群である」と、吉川幸次郎『中国詩人選集二集 宋詩概説』（岩波書店、一九六二年）に、梅堯臣の特徴は「題材の拡充、態度の拡充の意欲が、その鋭敏な詩の目を、日常的な家庭の生活、友情の生活にむかって、深

くくいとませ、従来の詩人の目のとどかなかった細部にまで、浸透することである」という。